

地域交流および二地域居住・移住に対する滞在型市民農園の役割 —笠間クラインガルテンを事例に—

付 凱林・原田康多・山田尚徳・帰 凱悦
谷中友紀・李 詩涵・川添 航・松井圭介

本研究では、地域交流及び二地域居住・移住に対する滞在型市民農園の役割について、笠間クラインガルテンを事例として検討した。近年、農業・農村地域においては人口流出により農業の担い手不足や生産低下が問題となっている。農村地域における滞在型グリーン・ツーリズムの開発は、地域コミュニティの活性化に寄与している。クラインガルテンは自然を求める都市住民と農村部の問題を解決し、新たなコミュニティを創造する役割を果たしている。笠間クラインガルテンの利用者は主に関東地方出身で、60代と70代の定年退職者が多い。利用者は農園活動をライフスタイルに組み込み、休憩時間や作業終了後の時間を利用してリラクゼーションやリモートワークなど多様な活動を行っている。また、利用者は農業知識の増加だけでなく、利用者同士や地元住民との交流にも大きな価値を見出している。クラインガルテンの利用経験が、利用者の二地域居住や移住を促進する上で積極的な役割を果たしている。

キーワード：滞在型市民農園、クラインガルテン、地域交流、二地域居住、移住、茨城県笠間市

I はじめに

I-1 研究背景

農業や農村地域は国土の保全、水源の涵養、自然環境の保全、良好な景観の形成、文化の伝承等農村で農業生産活動が行われることにより生まれる多面的機能を有する（農林水産省、2020）。近年では、日本における農山漁村地域を中心に、人口流出により農業の担い手不足や農業生産低下の現象が顕著となり、地域コミュニティの維持と発展が停滞している。このような人口流出は、若者を中心とした都市部への移住が背景にあり、農業だけでなく、農村における地域コミュニティ全体の維持と発展に大きな障壁となっている。農業生産の場としての機能の低下や農村における担い手不足等を理由として、維持が難しい状態にある。こうした状況の中、農村地域における滞在型グリーン・ツーリズムの開発は、地域コミュニティ

の活性化と持続可能な農業を維持するための新たなアプローチとなっている。農業生産に代わる農業活性化と持続可能な農業を維持するための新たなアプローチとなっている。農業生産に代わる農業の多面的価値を活用した農村の在り方として、クラインガルテンが現れた（畠山、2010）。ドイツのクラインガルテンが主に都市部にあるのに対して、日本のクラインガルテンの多くが農村部にあり、利用者も都市部の住民が多い。また、欧米では原則として宿泊ができないが、日本のクラインガルテンは大半が宿泊機能を備えている（祖田、1981）。クラインガルテンは耕作放棄地などを抱える農村部の問題を解決することに貢献し、また、コミュニティが希薄な都市部の住民と、コミュニティの維持が困難な農村部の住民の交流を実現することで、新たなコミュニティを創造する役割を果たしている（長谷山、1996）。日本におけるクラインガルテンは、持続可能性や多様化を志向す

ることで多面的な機能を発揮することを目指す「公益的機能発揮型」の市民農園である（工藤、2009）。

日本におけるクライנגルテンに関してはさまざまな観点からの研究が行われている。まず、都市農村間交流の視角から、クライנגルテン八千代を事例とした井上ほか（2009）では、クライングルテン利用者の交流への意識について把握し、都市農村間の交流実態を明らかにした。長野県四賀村を事例とした宮下（2006）は滞在グリーン・ツーリズムが展開される要因を村行政の役割、クライングルテンの運営をサポートする各研究会や「田舎の親戚」制度の創設、ガルテナー¹⁾という「よそ者」の存在という三点からまとめた。

一方で、成立基盤の角度から、山梨県甲斐市梅の里クライングルテンを扱った永井・星（2007）は、クライングルテンが整備された背景やその事業システムの実態を供給と需要の双方の視点から明らかにした。梅の里クライングルテンが成立した基盤には、主に通園が便利でさらに眺望が良いという好条件の土地であったという地域的要因、自治体・地元組合・利用者が有する潜在的な問題やニーズに対してクライングルテン事業がある程度応えられるものであったという内部的要因、市民農園整備のための法制度の基盤がつくられた外部的要因が存在していたことを指摘している。

また、都市農村間の二地域居住・移住に関する研究も行われている。たとえば、千葉県南房総および周辺地域を事例とした住吉（2021）は、二地域居住者の活動実態と生活形態の変容について明らかにし、二地域居住者と農村地域との関与の在り方と影響を検討し、二地域居住者の活動は個人の趣味や余暇の充実に端を発するものが多く、内実は多岐にわたっている実を指摘した。地理学ではこれらの現象への着目はが進んでおり、しかし、滞在型市民農園は新たな地域コミュニティの創出に及ぼす影響、および二地域居住・移住に対してどのような役割を果たしているかについてはさらなる分析が求められている。

1-2 研究目的と方法

以上を踏まえて、本研究では笠間クライングルテンを取り上げ、滞在型市民農園利用者である二地域居住者・移住者の属性・意識を調査し、農園利用実態および地域交流実態を把握した上、二地域居住・定住の意思決定プロセスの中に、移住推進・地域交流促進に対する滞在型市民農園の役割を明らかにする。

研究の手順は以下の通りである。まず、笠間クライングルテンを研究地域として取り上げ、滞在型市民農園の概要を述べる。Ⅱでは笠間クライングルテンにおける利用者の属性・利用実態・地域交流実態、および地域交流に対する意識を明らかにする。Ⅲでは笠間クライングルテン利用者の二地域居住・移住に対する意識と、利用後の移住者二地域居住者の意思決定プロセスを検討する。Ⅳでは、滞在型市民農園にかかわる各アクターの取り組みを明らかにした上で、移住促進・地域交流促進において滞在型市民農園の役割を考察する。

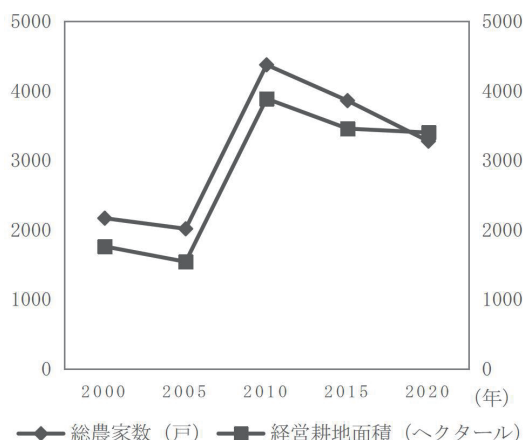
現地調査では、2022年10月から2023年5月にかけて、笠間市農政課や笠間クライングルテン管理者や利用者、本戸地区住民や移住者・二地域居住者に聞き取り調査を行った。また、地域住民と笠間クライングルテン利用者にアンケート調査を行い、地域交流に対する意識を分析した。

1-3 研究対象地域

1) 研究対象地域概要

研究対象地域である笠間市は、茨城県の中央部に位置し（第1図）、総面積は240.40km²である（笠間市、2023a）。地勢としては、市の北西部に八溝山系が穏やかに連なる丘陵地帯があり、南西部には愛宕山があるほか、北西部から南東部にかけてはおおむね平坦な台地が広がっており、市の中央を涸沼川が北西部から東部にかけて貫流している（笠間市、2023a）。また、笠間市は首都圏から約100kmの場所に位置しており、第1図で示すように、JR常磐線およびJR水戸線の鉄道、常磐自動車道および北関東自動車道といった高速交通体系が確立されているため、都心からのアクセスが良

成期にかけて果樹栽培が拡大し、多様な生産活動が取り組まれた（笠間市史編さん委員会編，2004）。また，1975（昭和50）年代には，田園都市事業や農村集落センター整備事業，新地域生産総合整備事業として地区内に集会所が続々設置された（笠間市史編さん委員会編，2004）。そして，1999（平成11）年から中山間地域総合整備事業として，市は南指原の地で滞在型市民農園である笠間クライ



第2図 笠間市における農家数と経営耕地面積の推移

（農林業センサスより作成）

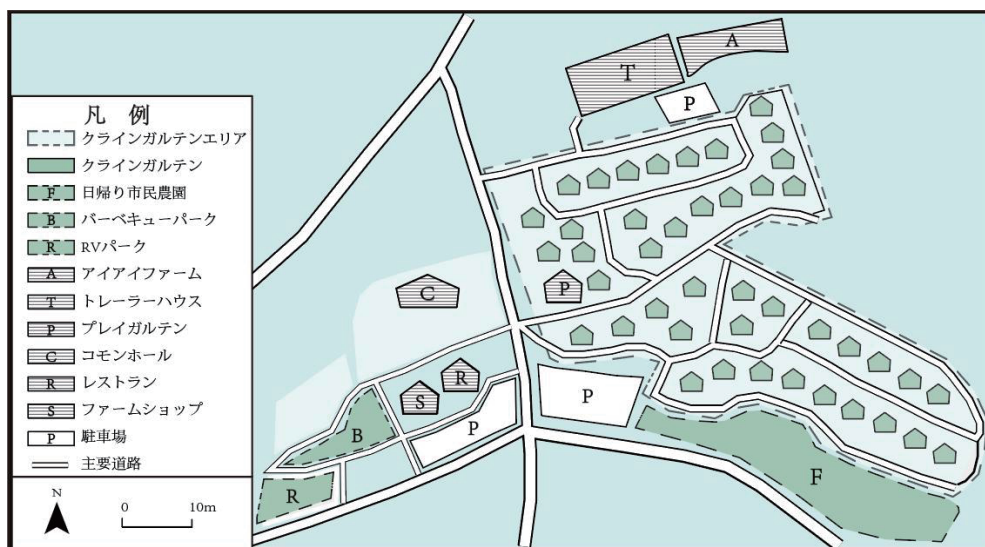
ンガルテンの事業に着手し，2000（平成12）年度に基本施設が完成した（笠間市史編さん委員会編，2004）。

2）笠間クラインガルテンの概要

笠間クラインガルテンは旧笠間の市街地から約5km南の本戸地区にあり，東京都心から100km圏内に位置する。全体の規模は約4haで，敷地の中には1区画300m²の「宿泊施設付き市民農園」が50区画あるほか，1区画30m²の「日帰り農園」が50区画，「クラブハウス」，「トレーラーハウス」，「キャンプサイト」，「バーベキュー場」，「農産物直売所」，「レストラン」などが併設されている。また，体験型農園として「AIAIFARM-アイアイファーム」-があり，様々な農体験を提供している（第3図）。

現在笠間クラインガルテンの管理運営は「株式会社マイファーム」によって行われており，利用者への栽培指導は付属施設の運営はその職員や臨時職員によって行われている。直売所で販売されている農作物等は主に笠間市内や周辺市町の農家が生産したものである。

農園利用者は年間利用料（宿泊施設付き市民農



第3図 笠間クラインガルテンにおける施設配置

（現地調査より作成）

園約40万円、日帰り市民農園約1万円)を支払うことで笠間クラインガルテンを利用しており、笠間市の良好な農村景観の中での農業活動や、施設内で行われる栽培講習会やクラインガルテン内外での交流を目的とした様々なイベントへの参加が可能である。宿泊施設付き市民農園の利用希望者は、次に示す6つの条件が設けられている。①笠間市民と積極的に交流を持てる者、②笠間クラインガルテンの年間活動プログラムに参加する意思のある者、③宿泊を伴う活動により、充実した菜園を目指す意思のある者、④市民農園区域における部分の共同作業に参加できる者、⑤2組以上の家族またはグループでの共同利用ができる者、⑥宿泊施設付き市民の烏煙利用規約等を遵守できる者。これらの条件を満たしたうえで希望者と職員が面接を行い、利用者が周辺地域との交流というクラインガルテンの理念に合致するかどうか判断され、合致されると判断された者のみ利用開始となる。この選抜基準は、農園が地域コミュニティとの積極的な交流を重視し、農園の活動に積極的に参加し、また、共同作業に貢献する意思のある利用者を対象としていることを示している。このように、クラインガルテンの利用は単に農業活動のためだけではなく、地域コミュニティとの結びつきを強化する目的も有している。

第1表は笠間クラインガルテンの変遷をまとめたものである。笠間クラインガルテンの設立経緯としては、1994年に笠間市が笠間市農業活性化基本構想を策定ことが発端である。この中で活性化の推進策として、都市部との交流を挙げ、農業振興と地域振興が期待される滞在型市民農園を活用した地域活性化策が進められた。2001年4月に、山・水田・集落が見える良好な農村景観が広がる本戸地区に笠間クラインガルテンが一部開園し、2002年4月に全体がオープンした。

クラインガルテンの管理運営は、中山間地域総合整備事業や農業構造改善事業などを利用し、開設当初は笠間市農政課が担当しており、質の高い運営を行うという目的を持ち、ホームページやブログの更新を頻繁に行い、活動をアピールしてい

第1表 笠間クラインガルテンの建設と発展に関する出来事

年	出来事
1994	「笠間市農業活性化基本構想」策定 ※都市部との交流
1996	「クラインガルテン構想」庁議提案
1997	「クラインガルテン基本計画」策定、「笠間市第4次総合計画」策定
1998	農業構造改善事業認可 申請
1999-2000	農村資源活用農業構造改善事業 実施 県北西部いきいき農業推進事業 実施
2001. 4	一部オープン(農園施設、農産物直売所、そば処) 中山間総合整備事業 実施(事業主体:茨城県土地改良事務所)
2002. 4	全体オープン(クラブハウス、その他)
2006. 3	指定管理者制度により、JA 茨城中央に管理運営移管(農産物直売所、そば処)
2007. 4	JA 茨城中央に管理運営移管(全体管理運営移管)
2010. 4	多目的交流施設(ゲストハウス)利用開始
2016. 4	一般財団法人笠間市農業公社に施設管理運営移管
2022. 4	株式会社マイファームに施設管理運営移管

(聞き取り調査資料より作成)

た。また、設立当初に掲げた都市農村間交流を達成するため、クラインガルテン内外における交流を利用者に積極的に促していた。

その後、指定管理者制度の導入により、2005年に農産物直売所など一部施設がJA茨城中央農業組合に管理運営が移管され、2007年に全体管理運営がJA茨城中央農業組合に移管された。2016年に農業協同組合の合併に伴い、一般財団法人笠間市農業公社に施設管理運営が移管された。

クラインガルテンの運営は栽培講習会などにおいて周辺の地域住民の協力があって成り立ってき

たが、地域住民の高齢化により協力が難しくなった。そこで民間企業を登用することで運営を自立させ、経営を創新する理由から2022年に株式会社マイファームに施設管理運営が移管された。株式会社マイファームへ移管されたことで新たにキャンプサイトやバーベキュー場などの新たなサービスが提供されるようになり、若年層を呼び込むための取り組みが行われるようになった。

Ⅱ 滞在型市民農園の利用実態・地域交流実態

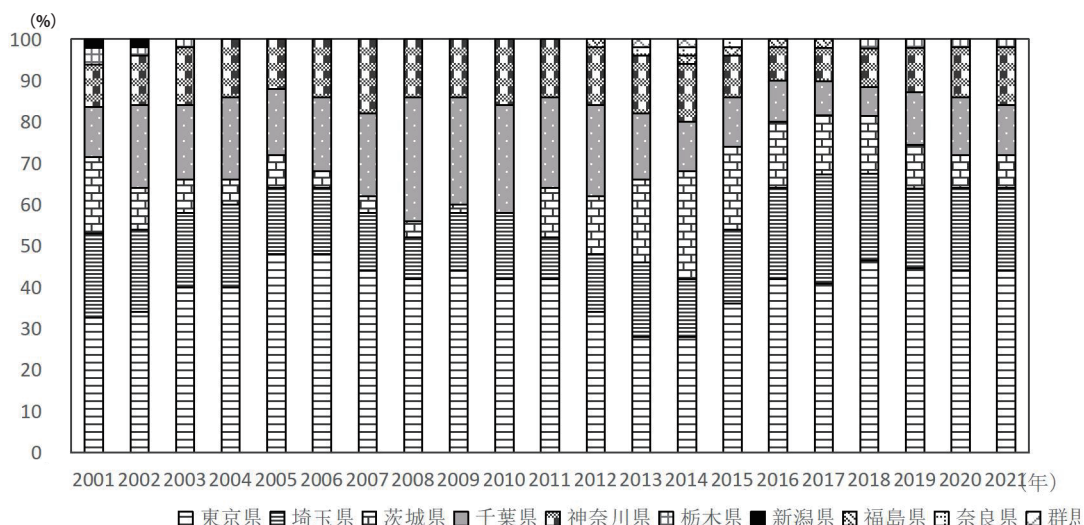
Ⅱ－１ 滞在型市民農園の利用者の属性

本節では、聞き取り調査とアンケート調査の結果と資料をもとに、笠間クラインガルテンにおける利用者の属性について分析する。2001年から2021年の間に、笠間クラインガルテン利用者の出身地は関東地方が中心となり、特に首都圏出身と在住の利用者が多い、その中でもとくに、東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県などが圧倒的に多い。東京都の利用者は平均して全体の40%を超え、笠間クラインガルテン利用者の中心とみなすことができる。一方、埼玉県と千葉県の利用者の割合は、20%前後で若干の変動があり、神奈川県の利用者の割合は15%前後である。2012年以後は新潟県、

群馬県、奈良県、福島県からの利用者もみられるが、1都3県以外の利用者割合は非常に低い（第4図）。

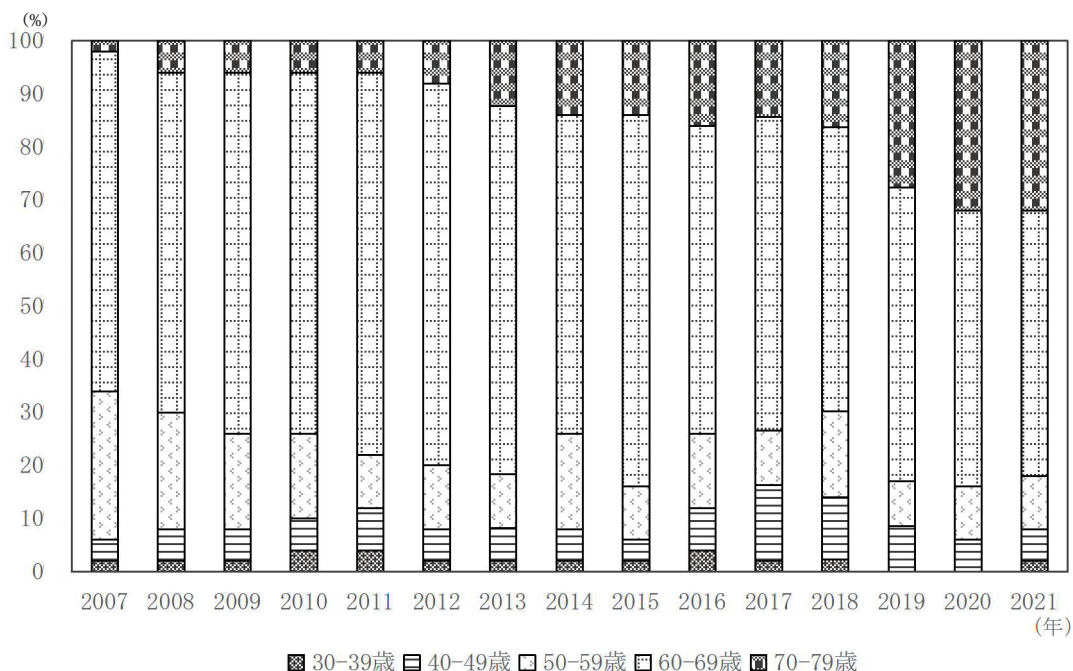
利用者の年齢層を分析すると、2007年から2021年の間、笠間クラインガルテン利用者は主に60代が中心であり、その割合は各年度の50%以上を占めている。2007年から2015年の間は70%前後を占めていたが、2015年以降は徐々に低下して50%になっている（第5図）。注目すべき点として、70代の利用者が年々増加しており、2007年の2%から2021年の32%に増加している。これは、もともと笠間クラインガルテンを使用していた60代の利用者が加齢にともない70代に移行し、70代の人数が増加した可能性があると考えられる。一方で、比較的若い30代と40代の利用者は高齢者世帯と比べて極めて少ない。現役の労働人口や子育て世帯等のため、定年後の高齢者と比べて余暇の時間が少ないなどが理由として挙げられる。

利用者の内訳を明らかにするために、2022年10月に11組の利用者に聞き取り調査、2023年5月に19組にアンケート調査を実施した。調査の結果から、30人のうち16人が農業経験を持っており、うち5人が3～5年間の農業経験で、6人が5年以上の経験を持っていた。また、農業経験者のうち、



第4図 クラインガルテン利用者の出身地推移（2001-2021年）

（農政課資料より作成）



第5図 クラインガルテン利用者の年齢層の推移（2007-2021年）

（農政課資料より作成）

一番多いのは家庭菜園で野菜を栽培した経験を持っている者が9人、その次が居住地の区民農園・市民農園を利用した経験のある者が6人である、さらに3人は子供の頃に家族の手伝いをした経験がある（第6図）。ここから、笠間クラインガルテンの利用者はある程度農業経験者の利用が顕著であるが、農業に対する興味がある初心者も少ないことがわかる。

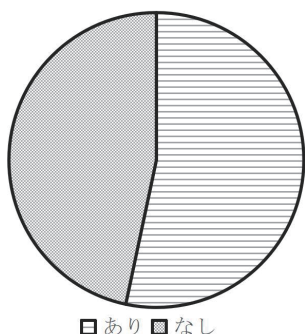
利用者の職業構成をみると、調査対象となった19名の利用者のうち、12名が定年退職者であり、これが大多数を占めている。会社員は5名であり、残りの利用者は専業主婦（主夫）や自営業者となる。利用者の家族形態に関しては、二人世帯が半数以上を占めることが分かり、次いで三人世帯と四人世帯が続く。特に、夫婦のみの世帯が主体をなしている。一方で、単独世帯やひとり親と子供から成る世帯、その他の親族同居の形態は少数である（第7図）。ここから、笠間クラインガルテンの利用者層は定年退職者が主体であり、夫婦中心の家族形態が多いことがよみとれる。これは、

定年後の生活において、夫婦で共有できる趣味や活動の場としてクラインガルテンが利用されていることを示している。また、クラインガルテンの利用が多様な世代や家族形態²⁾に対応していることも示唆されている。

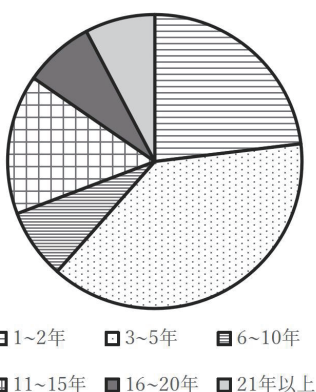
以上をまとめると、笠間クラインガルテンの利用者の出身地は主に関東地方、特に東京都に集中しており、主な利用者は60代および70代の定年退職者が大半であり、夫婦のみの世帯が主流になっている。

Ⅱ-2 利用者による農園の利用実態・利用要因

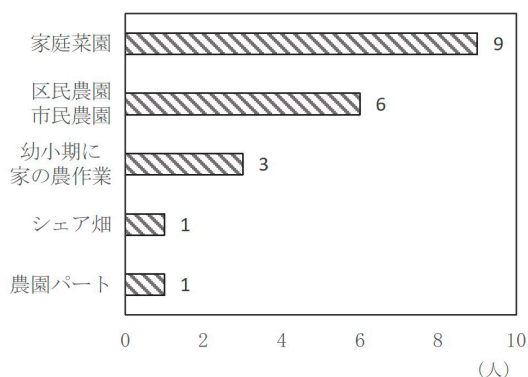
本節では、笠間クラインガルテン利用者の利用実態と利用要因を検討する。利用者は契約時に農業への従事を確保するために、一世帯だけでなく、二世帯での共同利用が条件としているため、利用者はグループの形で利用をしている。アンケート調査と聞き取り調査は各グループの代表者を対象として実施した。各グループの実態としては、親



第 6-a 図 笠間クライנגルテン利用者農業経験の有無

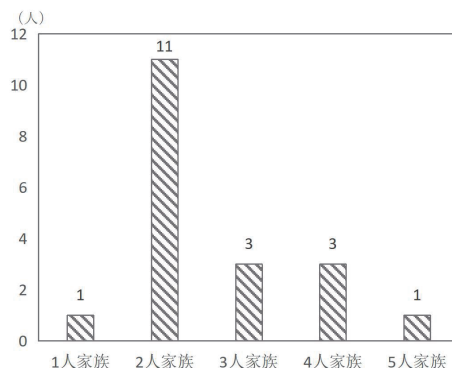


第 6-b 図 笠間クライングルテン利用者農業経験の年数

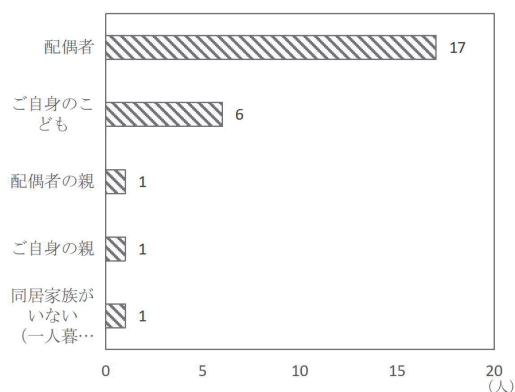


第 6-c 図 笠間クライングルテン利用者具体的農業経験

(アンケート調査より作成)



第 7-a 図 笠間クライングルテン利用者の家族人数
注) n=19

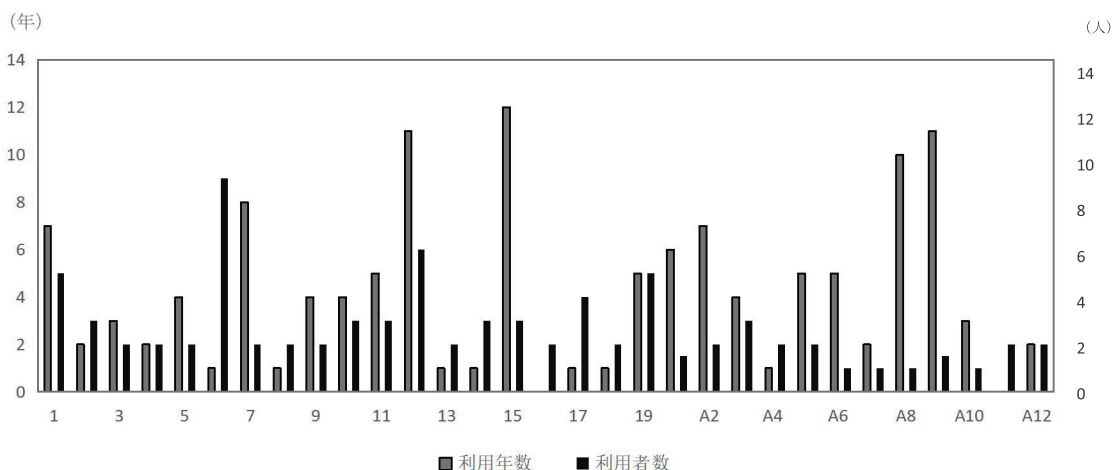


第 7-b 図 笠間クライングルテン利用者の同居者
人数

注) n=26

(アンケート調査より作成)

族で利用する利用者、友人と利用する利用者など多様である。また、利用年数に関して、最長5年間の利用が可能であるが、笠間クライングルテンでの生活を気に入る、再契約を望む利用者もいるため、その利用年数は多様である(第8図)。今回の調査対象者の中では、5年以下の利用者グループの中で1年目の利用者グループが最も多く、その次が2年目と4年目および5年目の利用者グループになる。一方で、5年を超えている利用者も存在している。6年から9年利用しているグループは8つがあり、10年以上の利用者グループが4組である。



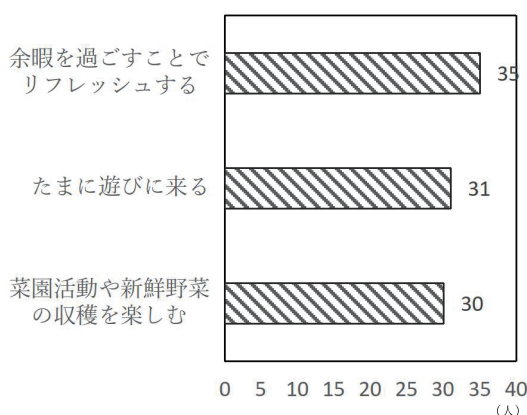
第8図 各利用者の利用年数及び各グループの利用者数

(アンケート調査より作成)

1) 利用者による農園の利用実態

各利用者グループの利用形態に関して、各グループの家族と友人を含めて利用者全員の利用形態をアンケート調査を通じて収集した。35人が笠間クラインガルテンで主に余暇を過ごすことでリフレッシュし、31人が菜園活動や野菜収穫を楽しんでいる(第9図)。一方で、たまに遊びに来る人数が30人であり、少数ではない。調査の結果から、これらの利用を行う利用者の数は顕著な差が見られないことが明らかにされた。さらに、聞き取り調査を通じて、友人や子供が休日に笠間クラインガルテンで集まり、共に時間を過ごすことがあることも明らかとなった。また、独りでクラインガルテンで農作業を行い、配偶者が時折手伝いに来るという利用者もいる。このような多様な利用の仕方が、クラインガルテンの魅力の一部であることと考えられる。

利用者の滞在の傾向として、一回の滞在にて2日以上滞在する利用者が約8割であることから宿泊を伴う滞在が主である。さらに、滞在する曜日をみると、約半数の利用者に特定の曜日の傾向はみられなかったが、残りの利用者の中で、約3割が休日に滞在し、約1割が平日に滞在していることが明らかとなった(第10図)。利用者は個々の生活スタイルや仕事のスケジュールに応じて滞

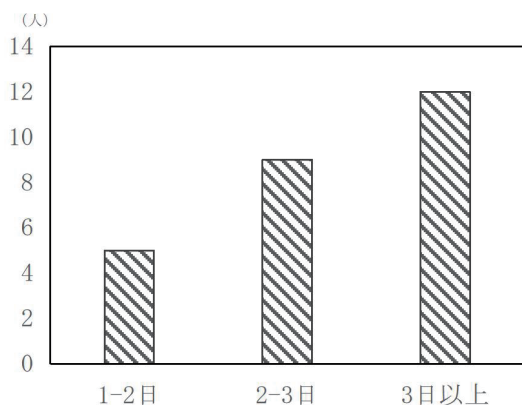


第9図 クラインガルテン利用者による農園の利用形態

(アンケート調査より作成)

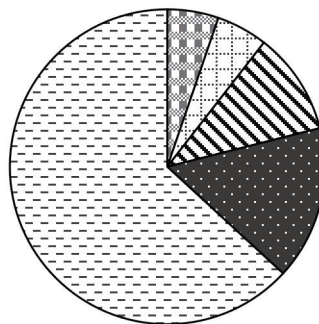
在日を選んでおり、また、休日に集中して滞在する利用者の割合が高いことから、週末を利用して訪問する利用者が多いことがよみとれる。

利用者が農園に訪問する際の時間距離としては63%の人が2.5時間以上であり、その次に、2-2.5時間の利用者が16%を占めており、2時間以下の利用者は全体の約2割にとどまっている。これらのデータから、前節で述べた利用者の出身地と相關する形で、遠方から通っている利用者が主体であることが示されている(第11図)。この傾向は、



第10-a図 クラインガルテン利用者による農園の滞在時間

注) n=26

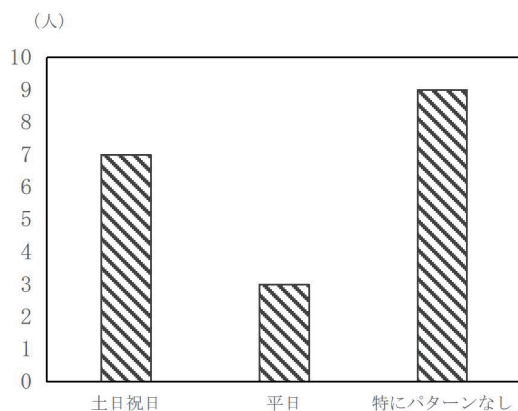


1時間以内 1~1.5時間 1.5~2時間

2~2.5時間 2.5時間以上

第11図 クラインガルテン利用者による農園に通う時間距離

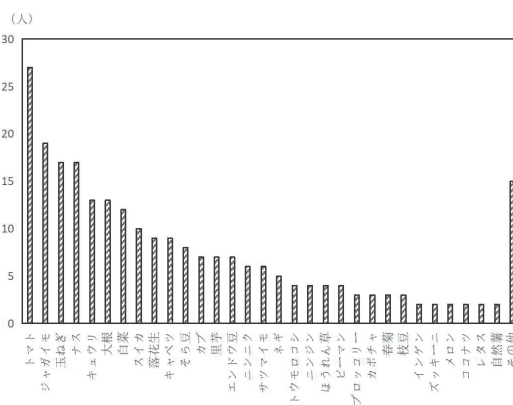
(アンケート調査より作成)



第10-b図 クラインガルテン利用者による農園の滞在パターン

注) n=19

(アンケート調査より作成)



第12図 クラインガルテン利用者による栽培する作物

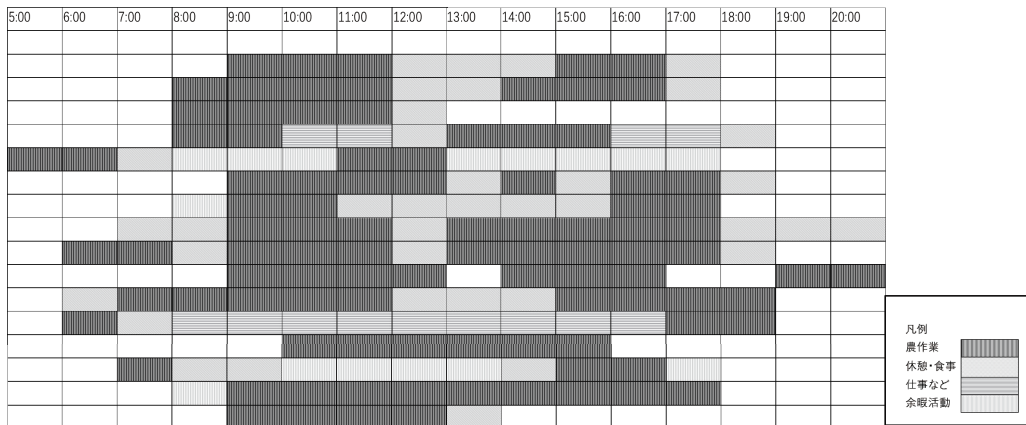
(アンケート調査より作成)

クラインガルテンが提供する環境が、都市での日常からの離脱を求める利用者にとって価値のあるものであることを示している。

クラインガルテン利用者が栽培している作物は季節により異なるものの、種類の多様性に富んでいる(第12図)。主にトマト、ジャガイモ、玉ねぎ、ナス、キュウリ、大根、白菜などの野菜が栽培されており、これらは比較的栽培が容易であり、達成感や満足感を得やすいことが原因だと推測される。一方で、果物や花、調味料、香辛料などは、

それらに比べて少ないことが観察された。この傾向は、利用者が農園での活動を通じて直接的な成果を感じたいという心理が反映されている可能性がある。また、野菜栽培の手軽さが、幅広い経験レベルの利用者にとって魅力的であることを示している。

利用者の一日のタイムスケジュールに関する分析を行った結果、様々なパターンが明らかになった。一部の利用者は早朝5時から6時の間から農作業を開始しているが、大半は朝9時頃に農作業



第13図 クラインガルテン利用者による農園での一日のタイムスケジュール
(アンケート調査より作成)

を開始し、正午頃に休憩と食事をとり、日が落ちる17時頃に作業を終えている（第13図）。農作業は一日の主要な活動であるが、余暇活動やリモートワークなど、クラインガルテンではその他の活動も行われている。この結果は、利用者が農園活動をライフスタイルに取り入れていることを示している。日中の時間帯に集中して作業することで、効率よく作物の管理を行っており、また、休憩時間や作業終了後の時間を利用して、趣味などのリラクゼーションやリモートワークなど、多様な活動を行っていることから、クラインガルテンは単に農作業や農業体験の場ではなく、農園生活の延長として、居住体験の場として機能しているとも考えられる。

2) 利用者による農園の利用要因

笠間クラインガルテンの利用者に対する調査結果を第2表に基づき整理すると、利用の要因は主に3つに分けられる。第1に、自然が豊かである点が挙げられる。この点について、多くの利用者は田舎生活への憧れ、過去の農業経験、またはふるさとに近い環境を求めていることが要因とされる。第2の要因としては、東京などの都市部からのアクセスの良さがあり、これにより容易に体験活動や二地域居住が可能となるメリットがある。第3に、笠間クラインガルテンの特性として、人々

第2表 笠間クラインガルテンを利用する要因

利用者	クラインガルテンの利用原因
1	・ふるさとと似ている魅力を感じる
2	・休憩できる場所と農園を持つ施設に憧れがある
3	・ゆっくりできる場所に憧れがある ・農業の手伝いをした幼少期を思い出せる ・家から通える距離である
4	・ビルがない田舎の景色に魅力を感じる ・東京からアクセスがいい
5	・自然が豊か ・都市と農村のいいとこ取りができるところに魅力を感じた
6	・自然の景色はきれい ・療養地として、気に入った ・（野菜が育つ様子に）幸福感、充実感、不思議感、感激感、満足感
7	・里山に近い ・笠間に便利、生活しやすい
8	・友人が笠間市内にあり、市に遊びに来た時に駅のポスターで知った
9	・会社の近く日比谷公園の交通会館から偶々笠間IGの情報を得て、応募した ・一日笠間IG体験した結果、居心地良いと感じた ・幸福感の価値観、田舎暮らしぶりを憧れになった ・他のクラインガルテンは東京から遠い
10	・50軒という規模がちょうどいい ・同じ考えを持つ人が集まっているため、居心地がよい ・野菜を買わない、物々交換など、自給自足の田舎らしさに憧れる ・田舎暮らしに惹かれていた ・子育てがひと段落して、第二の人生を早めに始めたいと思っていた
11	・地域住民の暮らしや交流に憧れを持っていた ・横浜住の影響で海があったほうがいいから次城に決めた ・地域に貢献したい（貢献した後にお世話になりたい）と思っていた ・友人が長野県のクラインガルテンを利用して、自分も近くのクラインガルテンを利用したい
12	・景色がいい ・福島に別荘を持っていて、笠間が東京から福島までの経由地として便利

(聞き取り調査より作成)

との交流や本格的な農業体験の機会が挙げられる。加えて、友人からの情報提供や広告を通じた認知も重要な要因として認識されている。以上から、笠間クラインガルテンが提供する環境は、利用者にとって多面からの魅力を持ち、さまざまなニーズを満たしていることがわかる。自然豊かな環境と都市部への近接性、そしてコミュニティとの関わりが、利用者にとって大きな価値を提供している。

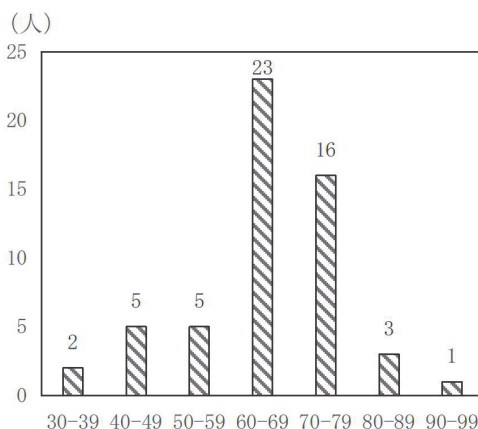
以上から笠間クラインガルテンの利用実態と利用要因についてまとめると以下の通りとなる。多くの利用者は親族や友人とグループで利用し、最長5年以上の再契約もある。利用形態は、余暇を過ごし、菜園活動や野菜収穫を楽しむものが多い。また、一回の滞在は通常2日以上で、滞在日は生活スタイルや仕事のスケジュールに応じて異なる。交通時間は、2.5時間以上かかる人が多い。栽培される作物はトマト、ジャガイモなどの比較的栽培が容易な野菜が中心となっている。農園で過ごす一日のスケジュールとしては早朝から農作業をし、夕方に終えるパターンが多い。クラインガルテンの利用要因は、自然豊かな環境、都市部へのアクセスの良さ、人との交流や本格的な農業体験の機会などで、多面からのニーズを満たしている。

Ⅱ－3 地元住民と農園利用者間の地域交流実態・交流意識

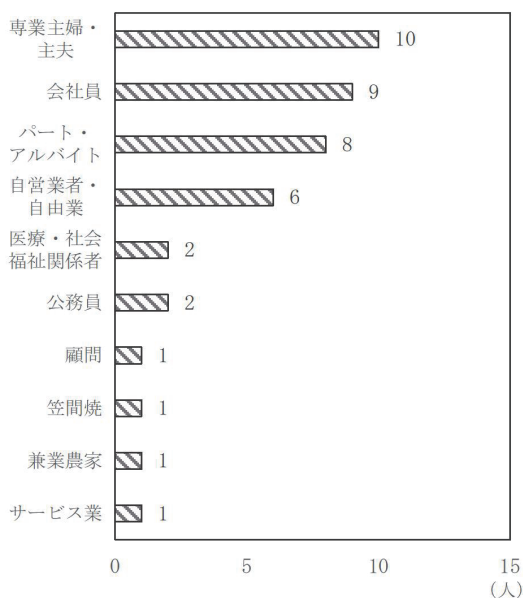
本研究では2023年5月に、地元住民とクラインガルテン利用者間の交流実態・交流意識等について検討するために、本戸地区の地域住民を対象にアンケート調査を実施した。配布された104部のアンケートのうち、56部が回収された。この調査は、地域コミュニティと笠間クラインガルテン利用者との間の交流実態および関係性の理解を深めることを目的としている。アンケートの内容は、地元住民のクラインガルテンに対する認識、利用者との交流経験、交流に対する意識や期待などである。

1) 地元住民と農園利用者間の地域交流実態

アンケート調査の対象者は本戸地区に在住している住民であり、特に60代と70代が主体である。(第14図) 職業分布においては、家庭主婦(主夫)が最も多く、その次が会社員であり、そしてパート・アルバイトが続く。また、笠間クラインガルテン内の施設を利用理由として(第15図)、農産直売所の利用が圧倒的に多く、地域住民が農産直

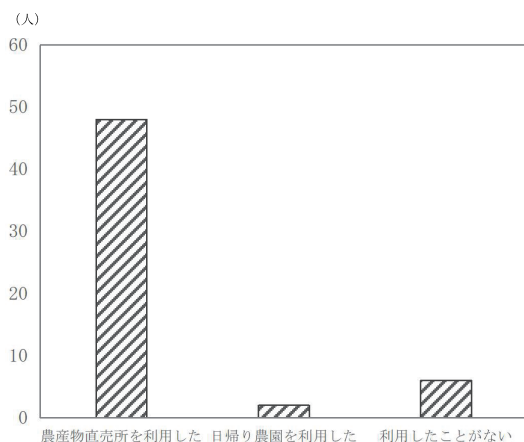


第14-a図 地元住民向けアンケート調査対象者の年齢層



第14-b図 地元住民向けアンケート調査対象者の職業

(アンケート調査より作成)



第15図 地元住民による農園内施設の利用実態

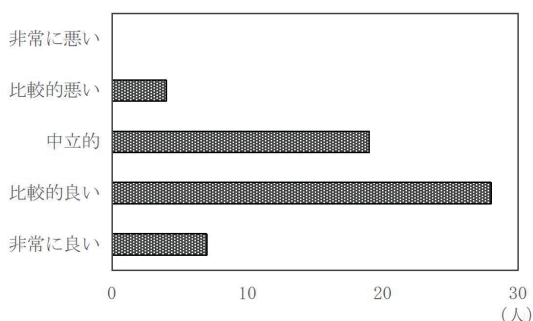
注) 複数回答可

(アンケート調査より作成)

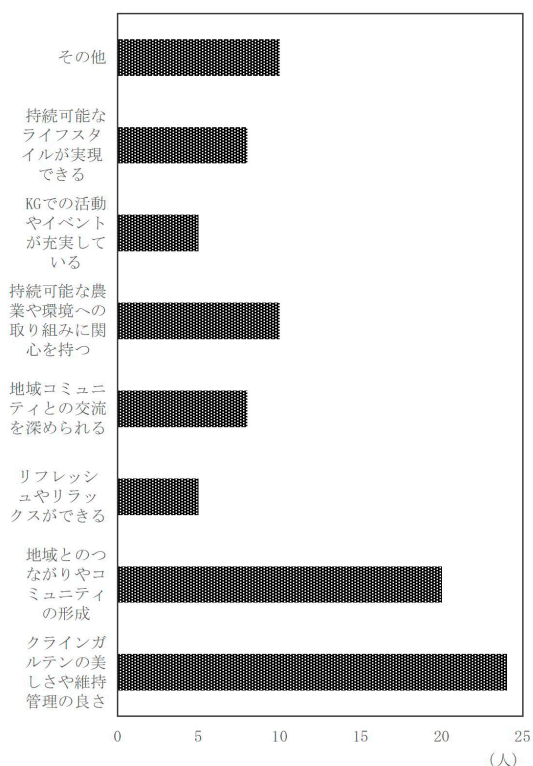
売所を購買の場として認識していることを示唆している。

地元住民によるクラインガルテンに対する印象を分析すると、約半分の地元住民が笠間クラインガルテンに対して比較的良好な印象を持っている(第16図)。中立的な印象を持っている地元住民が3割となっている。肯定的な印象の背景として、笠間クラインガルテンの美しさや良好な維持管理が主要因として挙げられる。加えて、地域コミュニティとのつながりやその形成に対する貢献も、肯定的な評価の一因であることが示された。また、持続可能な農業や環境保全に対する関心も、地元住民の肯定的な印象形成に寄与している。これらの結果から、笠間クラインガルテンが地域コミュニティに与える影響は、単にレクリエーションの場を提供することにとどまらず、環境保全、コミュニティの形成にも寄与していることが理解される。地域住民による農園利用者との交流形態としては「会うと挨拶をする」段階が圧倒的に多く、その次に「立ち話をする」のは25%にとどまり、「農作業を手伝う」や「自宅に招待する」といった回答は微小である(第17図)。

第3表は、2016年から2021年までの期間に笠間クラインガルテンにおいて開催されたイベントの回数と参加者数を示している。この期間を通じて、



第16-a図 クラインガルテンに対する印象



第16-b図 クラインガルテンに対する印象の理由

注) 複数回答可

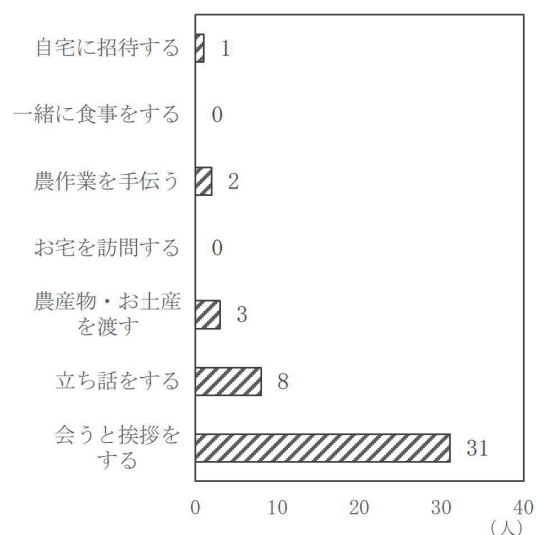
(アンケート調査より作成)

イベントの開催回数は2016年から2018年にかけて増加し、その後減少する傾向にある。具体的には、利用者対象のイベント、一般対象のイベント、そして利用者自主活動の回数も同様の傾向を示し、2021年にはこれらのイベントが最高数に達した後、減少している。

各年度のイベント参加者数に目を向けると、2016年から2021年にかけて、利用者と地域住民の参加者数は大幅に増加しており、2021年にピークに達した。しかし、2020年と2021年には参加者数が減少傾向にあることが確認される。「関係者」の人数も増加しており、2018年と2019年の増加が特に顕著である。このことから、笠間クラインガルテンでのイベントが利用者や地域住民、関係者によりある程度受け入れられ、地元コミュニティとの結びつきが形成していることが示唆されている。しかしながら、最近の減少傾向は、イベント

企画や運営面での課題や新型コロナウイルス感染症拡大の影響を反映している可能性がある。

イベント内容は多岐にわたっており、農作業の技術や安全に関する教育的なものとして、栽培講習会や安全講習会などがある。これは、利用者が農業技術を学び、安全な農作業を行うための知識を深める機会を提供している。さらに、趣味やレクリエーションに焦点を当てたイベントも開催されており、ラジオ体操やフラダンスなどの活動が含まれる。このようなイベントの多様性は、クラインガルテンが利用者にとって単に農作業に関連する知識や技術の習得に留まらず、交流を深める機会を創出している。



第17図 地元住民と農園利用者間の交流形態
注) n=32
(アンケート調査より作成)

2) 地元住民と農園利用者の地域交流に対する意識

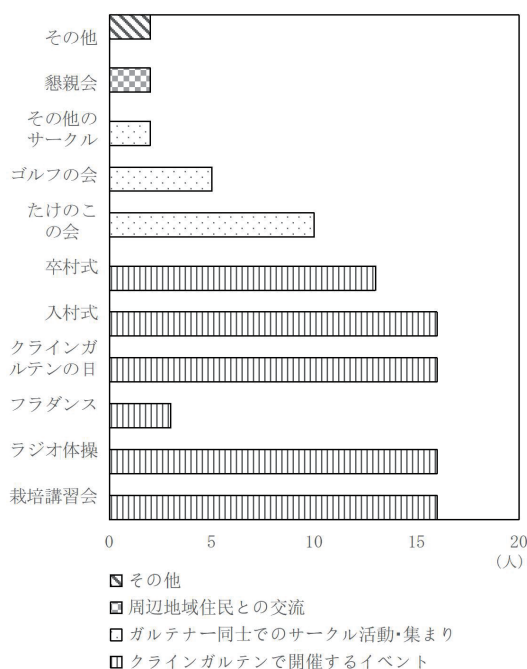
利用者による交流活動の参加状況を第18図に示した(第18図)。クラインガルテンで開催しているイベントの中、8割以上の利用者は栽培講習会やラジオ体操、クラインガルテンの日と入村式に参加している。また、利用者間のサークル活動やイベントへの参加状況に関して、半数以上の利用者が「たけのこの会」に参加しており、さらに約2割以上が「ゴルフの会」に参加している。これに加えて、約1割の利用者が地元住民との懇親会などの交流活動にも参加している。利用者同士間の交流が盛んに行われていることが窺える。

第19図には、笠間クラインガルテンの利用者が地域交流に対して持つ意識が示されている。この

第3表 笠間クラインガルテンにおけるイベント開催及び参加者数(各年度)

年度	参加者数(人)				イベント開催数(回)			
	ガルテナ参加者	地域住民	関係者	合計	ガルテナ対象	一般対象	ガルテナ自主活動	合計
2017	1558	130	197	1885	93	7	10	110
2018	1544	179	200	1923	100	15	21	136
2019	2696	407	224	3327	126	37	24	187
2020	2721	1395	376	4492	120	33	23	176
2021	1918	1033	204	3144	84	17	7	108
2022	2287	5	191	2483	91	13	11	115

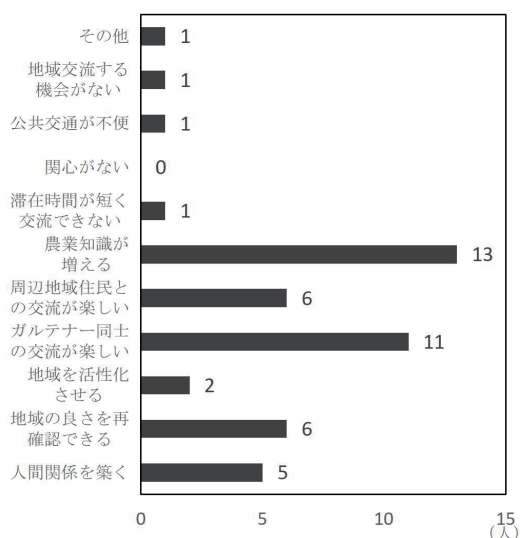
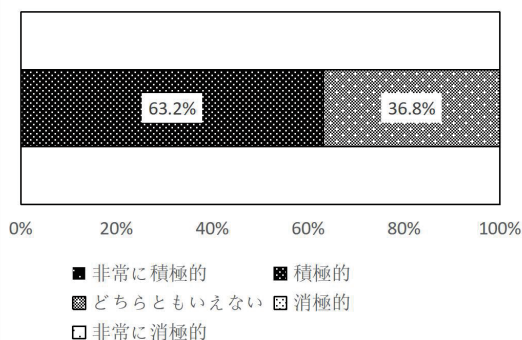
(農政課・農業公社資料より作成)



第18図 クラインガルテン利用者による交流活動への参加状況
(アンケート調査より作成)

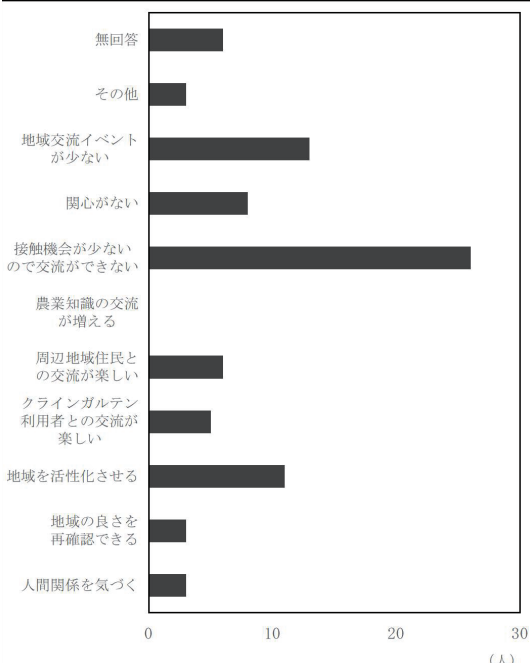
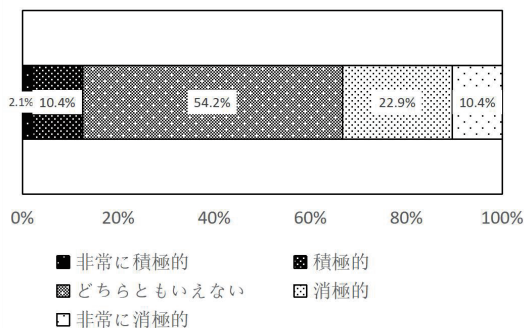
図から、63.2%の利用者が地域交流に対して積極的な態度を持っており、残りの36.8%は中立的な態度であることが分かる。その理由としては、いくつかの要因が挙げられる。約6割の利用者が「農業知識が増える」という理由を選んでおり、約5割の利用者が「ガルテナー同士の交流の楽しさ」を感じている。さらに、約3割の利用者は「周辺地域住民との交流の楽しさ」を原因として挙げている。また、一部の利用者は「地域の良さを再確認できる」「人間関係が築ける」という理由で地域交流に対して積極的、あるいは中立的な態度を持っている。ここから、笠間クラインガルテンの利用者は、農業活動を通じて得られる知識の増加だけでなく、ガルテナー同士、また地域住民との交流に価値を見出していることが明らかとなった。

クラインガルテン利用者と比べて、地元住民側の地域交流に対する意識は異なっている(第20図)。「非常に積極的」「積極的」と答えた住民は全体の一割にとどまり、約半数は中立的な態度を



第19図 クラインガルテン利用者による地域交流に対する意識及びその理由
(アンケート調査より作成)

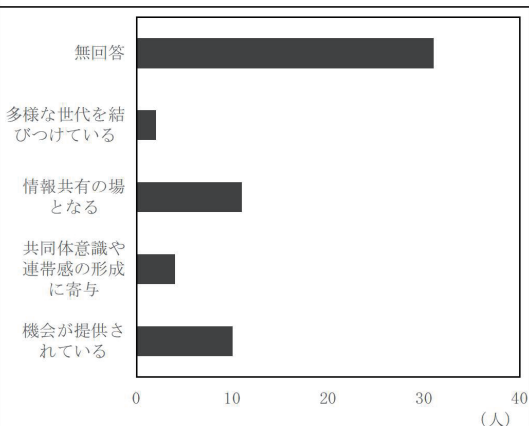
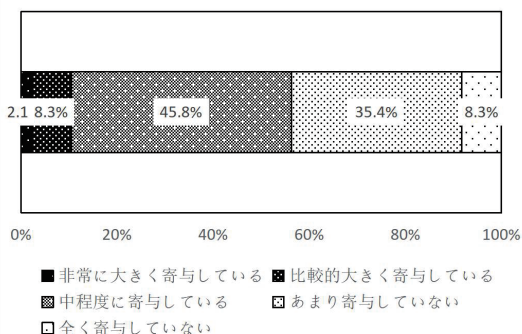
持っている。また、「消極的」「非常に消極的」はそれぞれ約2割と1割存在している。地域交流に対する地元住民の全体的な態度が肯定的でない理由として、「接触機会がないため交流できない」という回答が最も多く、約半数に上る。次いで多い原因として、様々な見解が混在していることが明らかになる。地域交流イベントが不足していると感じる住民が25.5%。地域交流の機会が限られていることを反映している。特に、「地域を活性化させる」と答えた住民が約2割いることは注目に値する。また、「クラインガルテン利用者との交流が楽しい」と「地元住民との交流が楽しい」と答えた住民がそれぞれ1割存在する。これは地



第20図 地元住民による地域交流イベントへの参加意識及びその理由
(アンケート調査より作成)

域交流が地域の活性化に寄与すると考える住民が一定数存在することを示している。

第21図は、地域住民が笠間クラインガルテンが地域コミュニティの形成や交流に寄与しているかどうかについての認識を示している。56.2%の地元住民がクラインガルテンが地域コミュニティの形成や交流に寄与していると考えている。クラインガルテンが地域コミュニティに寄与していると考え理由として、「情報共有の場となる」「交流の機会が提供されている」という点が挙げられて



第21図 地元住民による笠間クラインガルテンが地域コミュニティの形成や交流に寄与する程度
(アンケート調査より作成)

おり、これらの要因が約8割の比率を占めている。笠間クラインガルテンが地域住民にとって情報交換の場や交流の機会を提供しているという認識が広がっていることを示しており、地域コミュニティの形成や強化において役割を果たしていることを反映している。しかし、全体の40%の住民が寄与していないと感じている。

さらに、地元住民からは近年、地域交流イベントに関する告知、開催、参加の減少が指摘されている（第4表）。今後の希望として、笠間クラインガルテン施設の充実とイベント開催の充実が挙げられている。地域コミュニティとクラインガルテンの関わりにおける課題を示しており、地元住民とクラインガルテン利用者との交流促進に影響を与えている可能性がある。これは、地域住民が

第4表 地元住民によるクライנגルテンに対する意見及び評価

地域住民によるクライングルテンに関する所感・評価・希望	
所感・評価	1-A イベント開催の減少
	1-B イベント告知の減少
	1-C イベント参加の減少
	1-D クライングルテンに行く頻度の減少
	1-E 昔あった施設の賑わい
希望	2-A 施設の充実
	2-B 地域交流イベントの充実
3 その他	

(アンケート調査及び聞き取り調査より作成)

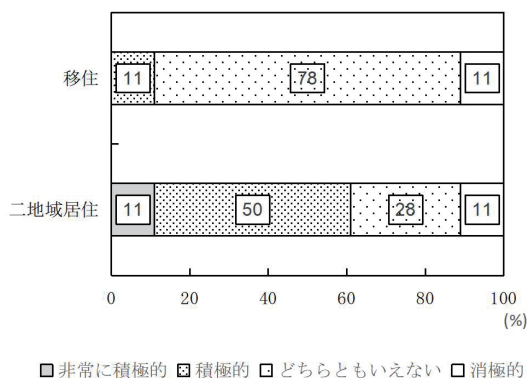
クライングルテンを地域コミュニティの活性化や交流の場として価値のあるものと見なしていることを示している。施設の充実やイベント開催の増加は、地域住民の参加を促し、地域全体のコミュニケーションや交流を深める機会を提供しうる点を指摘できる。

Ⅲ 二地域居住・移住に対する意識と意思決定プロセス

Ⅲ-1 利用者の二地域居住・移住に対する意識

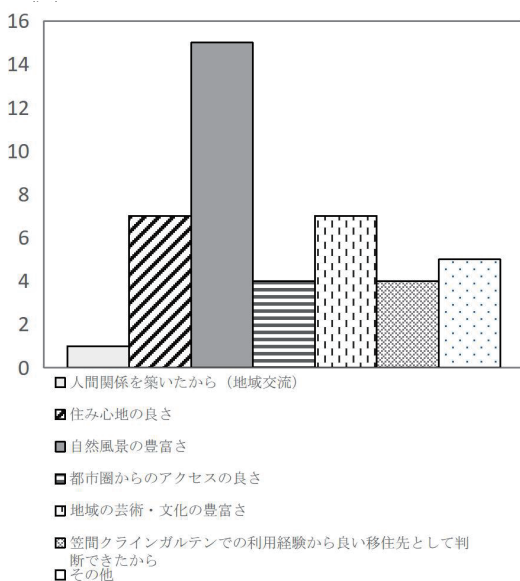
本節では、笠間クライングルテン利用者の二地域居住および移住に対する意識に焦点を当てて検討する。調査結果から、約1割の利用者が二地域居住に「非常に積極的」であり、5割が「積極的」と回答していることが判明した。一方で、「中立的」な考えを持っている利用者は3割弱で、「消極的」な回答をしたのは約1割にとどまる(第22図)。

二地域居住に対する積極的な意識の原因には、自然風景の豊かさや住み心地の良さ、地域文化芸術の充実が大きな要因として挙げられる(第23図)。これらの要素は、笠間クライングルテンの利用者にとって重要な魅力となっており、彼らが



第22図 クライングルテン利用者による二地域居住に対する意識

(アンケート調査より作成)



第23図 農園利用者による二地域居住したい理由

(アンケート調査より作成)

笠間を二地域居住の候補地として高く評価している理由を示している。ここから笠間の自然環境や文化的要素が、利用者にとって魅力的な生活の選択肢として認識されていることが分かる。さらに、笠間クライングルテンでの具体的な利用経験が、この地域を良い移住先として判断する上で重要な役割を果たしている。二地域居住に対する一部の消極的な意識の原因として、高齢者としての移動

の難しさや、家庭での介護責任などが挙げられている。

移住に対する意識に関しては、中立的な考えを持っている利用者が主流であり、積極的な考えを持つ利用者は1割にとどまる（第22図）。これは、現在のクライנגルテンでの生活に満足していること、また農作業を行い良い結果が出れば移住を考えるという利用者が存在していることを示す。これにより、笠間クライנגルテン利用者の中で、二地域居住に対する興味や意欲がある程度存在していることが示されが、移住に対しては慎重な態度を示す利用者が多いことも明らかであり、この理由は生活環境、家庭の状況、農業活動への満足度など多岐にわたる。

Ⅲ－２ クライנגルテン利用後の二地域居住者・移住者の移住意思決定プロセス

次に、笠間クライングルテンを経由した二地域居住や移住に関する意思決定プロセスについて述べていく。二地域居住者・移住者計4名からの聞き取り調査の結果、意思決定には笠間クラインガ

ルテンを通じた様々な経験が大きく関わっていることが明らかになった（第5表）。まず、対象者1は、笠間クライングルテンを卒業後、東京と水戸市を拠点として二地域居住を行っている。二地域居住の要因としては、東京では味わえない非日常感や農作業、芸術、交通面等といった茨城県や水戸市ならではの魅力が挙げられている。特に、農作業ができる生活は、笠間クライングルテンが教えてくれる魅力であると評価されており、これが二地域居住で得られる満足感に繋がっている。また、笠間クライングルテンを農業協同組合が経営していた時期に、職員に家を紹介してもらったことで現在まで居住するに至っている。

対象者2は、柏市と笠間市を拠点に二地域居住を行っており、二地域居住の要因として、農業を行いたいという希望があったことや、共感できる仲間がいること、環境の良さ等が挙げられている。また、笠間クライングルテンを通じて知り合った地域住民に土地を借り、当時の仲間達と共同で家を建て、現在まで居住するに至っている。

次に、対象者3については、笠間市への移住の

第5表 二地域居住者・移住者による移住要因・きっかけ

対象者	移住 / 二地域居住	移住年数	家の購入状況	移住要因・きっかけ
1	二地域居住	14年目		・非日常感を味わえる（気分転換） ・ドライブできる ・交通面は来やすい ・文化（焼き物、美術館、音楽など）に魅力を感じる ・自然に近い、里山希望 ・田舎暮らしが好き
2	移住	6年目		・釣り、狩猟などのアウトドアが好き ・笠間は住みやすい ・地元との付き合いできる ・笠間は病院が多い ・EGでの生活は移住要因の80%
3	二地域居住	19年目	地元の方に借地され、家を建てた	・農業やりたい ・笠間は柏から遠くはない ・共感できる仲間がいる ・好きな酒場がある ・自然環境・景色がいい
4	移住	5年目		・笠間の良さ（笠間稲荷、古い町、歴史）を実感した ・EGと地元の繋がり、交流が多い ・農業ができること ・「区長」制度は住むのに助かった

（聞き取り調査より作成）

要因として、里山特有の自然の近さや、そこでのアウトドア活動、地域住民との交流等が挙げられている。特に、笠間クラインガルテンでの経験は移住の要因の8割と感じているほどであり、そこでのサークル活動やパーティといったイベント等への参加を通じて、地域住民との交流も行われた。

対象者4については、笠間市への移住の要因として、笠間稲荷や古い街並み、歴史といった笠間の魅力を実感したことや、笠間クラインガルテンと地域住民との交流の多さ、農業ができること、都市には無い区長制度による地域住民とのコミュニケーションの円滑さが挙げられている。実際に、笠間クラインガルテンを利用していた時期には、様々なイベントや活動に参加し、先輩のガルテナーから地域住民を紹介してもらうことで、地域との繋がりが生まれた。そして、このような笠間クラインガルテンでの経験があったため、移住前後での適応上の障壁が無かったようである。

以上の4名の事例から、笠間市（や水戸市）への二地域居住・移住を行う大きな要因としては、文化の魅力や、笠間クラインガルテンを通じた自然豊かな里山での生活、農業活動、地域住民との交流が挙げられた。特に、笠間クラインガルテンを通じた地域住民との交流については、地域コミュニティに受け入れられるというソフト面での恩恵だけでなく、二地域居住・移住後に住む場所を見つけられるというハード面での恩恵もあるということがわかった。そのため、笠間クラインガルテンを通じた様々な経験が、二地域居住や移住のプロセスで果たす役割は非常に大きいといえる。また、聞き取り調査では、クラインガルテン生活の延長として移住したのも存在する。

IV 滞在型市民農園の二地域居住・移住及び地域交流に対する役割

以上を踏まえて、滞在型市民農園が地域交流に対して、どのような影響を及ぼすかについて、地域交流の実態、地元住民と滞在型市民農園の利用者が地域交流に対する意識の角度から検討する。

また、利用者の二地域居住・移住に対してどのような役割を果たしているかをについて、利用者の利用実態および二地域居住・移住に対する意識、農園利用後の移住者と二地域居住者の意識決定プロセスから考察する。

IV-1 笠間クラインガルテン利用者と都市農村間交流

笠間クラインガルテンの開設以来の変遷と、それに伴う管理運営の変化は、農園利用者との関係性にも大きな影響を与えている。2001年に開園し、当初は笠間市農政課が管理を行っていたが、その後公的機関への移管を経て、最終的には民間団体に管理が委ねられた。この管理構造の変化は、農園管理者と利用者間の関係性の変容、および地域住民と農園利用者の関係性の変化にもつながっている。設立当社の公的機関と利用者との関係は、公共サービス提供者と受益者という形であったと考えられる。この段階では、運営は主に市役所や公的機関の指針に従い、地域住民と利用者の交流や農業体験の場として機能していた。管理団体の職員と農園利用者間も個人的な繋がりができた。しかし、聞き取り調査により、運営が民間団体に移管された後、農園と利用者の関係は「顧客と店舗」のような関係に変化した可能性がある。民間団体による運営は、サービス提供においてより市場志向的かつ顧客中心的なアプローチを採用する傾向がある。これにより、利用者の要望や満足度がより重視されるようになり、サービスの質や多様性、宣伝方法やイベント開催のターゲット層などにおいて変化がみられる可能性が高い。このような運営体制の変化は、クラインガルテンが地域交流やコミュニティ形成に与える影響を考察する上で、重要な要素となる。

利用者の属性と特徴に目を向けると、利用者の出身地は主に関東地方に集中しており、特に東京都からの利用者が多い。この地理的な分布は、笠間クラインガルテンが都市部からのアクセスの良さを活かし、クラインガルテンが提供した環境が、都市生活の日常から離脱を求める利用者にとって

価値のあるものであり、都市住民にとって魅力的なリフレッシュの場となっていることを示している。利用者層の多くは60代および70代の定年退職者であり、クライנגアルテンが退職後の余暇活動や趣味の場として選ばれていることを意味している。家族形態は夫婦のみの世帯が主流であり、夫婦で共有できる活動や趣味として利用されていることがよみとれる。休日に滞在する利用者の割合が高いことは、クライングアルテンが単なる農業活動の場を超え、社会的な交流や家族との絆を深める場としての役割を果たしているといえる。利用者にとって、週末のリフレッシュや自然の中でのリラクゼーションは、日常生活のストレスからの解放を意味し、農業に留まらず、地域コミュニティに対しても重要な役割を担っていることを示している。

また、利用者は農園活動をライフスタイルに組み込んでおり、効率的に作物管理を行っている。休憩時間や作業終了後の時間を利用してリラクゼーションやリモートワークなど多様な活動を行っていることから、クライングアルテンが生活の延長線上にある農村居住体験の場として機能していると推測される。これは、クライングアルテンが農業活動のみならず、利用者の生活の質向上に寄与していることを示している。

他方、笠間クライングアルテンの利用者は、農業知識の増加だけでなく、ガルテナー同士、また地元住民との交流にも大きな価値を見出していることが明らかとなった。これは、利用者にとってのみならず、地域コミュニティ全体にとっても重要な意味を持つ。一方で、地元住民の地域交流に対する意識には異なる傾向がみられる。地域交流が地域の活性化に寄与すると考える住民が一定数いる一方で、交流機会の不足や交流イベントの開催不足といった課題も存在している。このことから、地域コミュニティとクライングアルテン利用者との間でのより積極的な交流を促進するためには、クライングアルテンの施設やイベントのさらなる充実が求められている。このような交流促進やコミュニティへの貢献に向けた取り組みを行うことで、

地域コミュニティの活性化と強化が期待される。このように、笠間クライングアルテンは農業体験の場としてだけでなく、地域コミュニティとの結びつきを強化し、地域全体の活性化に寄与する可能性をもっているといえる。

Ⅳ－２ 笠間クライングアルテンと二地域居住・移住

クライングアルテンでの居住体験が、利用者が二地域居住や移住を検討する上でどのような影響を与えているかを理解するためには、利用者の二地域居住・移住に対する意識や、利用後の二地域居住・移住の意識決定プロセスを分析することが重要である。

笠間クライングアルテンでの利用経験が、利用者の移住や二地域居住に対する意識形成において重要な役割を果たしている。現地調査の結果からは、二地域居住に対する興味や意欲が高く、農園の提供する環境が利用者にとって魅力的な居住選択肢として考慮されていることを示唆している。一方で、移住に対して慎重な態度を示す利用者が多いことも認められる。この慎重な姿勢の背後には、生活環境、家庭の状況、農業活動への満足度などの要因が関与していると考えられる。

利用者が二地域居住や移住を検討する際の主要な要因として、文化の魅力や笠間クライングアルテンを通じた自然の中での生活、農業活動、そして地域住民との交流が、重要な動機付けとなっている。特に、笠間クライングアルテンを通じた地域住民との交流は、地域コミュニティに参入することで利用者に安心感を与え、地域に根ざした生活をおくることが可能となる。一方、二地域居住や移住後の住む場所を見つけやすくなるなど、具体的な生活の場の利点も存在する。これらの点から、笠間クライングアルテンでの多様な経験が、二地域居住や移住の決定プロセスにおいて非常に重要な役割を果たしているといえる。このような経験は、利用者が新たな生活の形態を検討する際の重要な基盤となり、地域への移住や二地域居住を選択する際のきっかけとなる。

V おわりに

本研究では、笠間クラインガルテンを事例に、滞在型市民農園が地域交流および二地域居住移住に対する役割を検討してきた。結果として、以下のことが明らかとなった。

笠間クラインガルテンの管理体制は市の農政課から始まり、公的機関への移管を経て、最終的に民間団体による管理に移行した。この管理体制の変化は、農園の利用者との関係性、そして地域住民との関係性に大きな影響を与えた。初期の段階では、農園は公共サービスとして機能し、地域交流や農業体験の場として利用されたが、民間団体による運営に移行した後、農園と利用者の関係はより商業的なものに変化した可能性がある。利用者の特性に注目すると、主に関東地方、特に東京都からの来園者が多く、年齢層は60代と70代の退職者が中心である。これは、農園が退職後の余暇活動の場として重要な役割を果たしていることを示す。また、休日を利用して滞在する利用者が多いことから、農園は単に農業活動の場を超え、社会的な交流や家族との絆を深める場として機能していたことが窺える。

また、笠間クラインガルテンでの居住体験は、利用者が二地域居住や移住を検討する際の意識形

成に重要な役割を果たしている。特に、二地域居住に対する興味や意欲が高く、農園の提供する環境が魅力的な選択肢として考慮されている。一方で、移住に対しては、生活環境や家庭の状況、農業活動への満足度などの様々な要因を考慮して慎重な姿勢を示す利用者もいる。移住や二地域居住を検討する際の主要な動機としては、文化の魅力、自然環境、農業活動、地域住民との交流が挙げられる。これらの経験は、新しい生活形態を検討する際の重要な基盤となり、地域への移住や二地域居住を選択する際の鍵となる要素である。

総じて、笠間クラインガルテンの事例からは、滞在型市民農園が地域交流の促進や二地域居住・移住の意思決定に重要な役割を担っていることが明らかとなった。笠間クラインガルテンは単に農業体験の場を超えて、社会的な交流の促進や新しいライフスタイルを実現する場として機能し、また、利用者の生活の質の向上や新しい居住形態の選択に影響を与えている。このように、滞在型市民農園は、地域コミュニティの活性化に貢献し、地域交流や居住形態の多様化において重要な役割を果たしている。また、今後は滞在型市民農園利用者と地元住民による都市農村間の新たな関係構築についても議論が求められている。

本研究にあたり、調査にご協力いただきました笠間市の皆様に深く感謝申し上げます。とくに、笠間市役所農政課、企画政策課および移住推進課のご担当者様、株式会社マイファームおよび一般財団法人農業公社のご担当者様、また、笠間クラインガルテン利用者の皆様、本戸地区住民の皆様から多大なるご協力を賜りました。現地調査にあたり、筑波大学の千葉竜平様とLai shangyu様より多大なるご尽力を賜りました。本稿の執筆にあたって筑波大学生命環境系の先生方からご指導いただきました。末筆ながら厚く御礼申し上げます。本研究には2023年度科学研究費基盤B 23H03640（研究代表者：松井圭介）の一部を利用した。

【注】

- 1) 滞在型市民農園の利用者。
- 2) 家族の類型分類は①単独世帯、②夫婦のみの世帯、③夫婦と子供から成る世帯、④ひとり親と子供から成る世帯、⑤その他世帯（三世代・親族同居など）。

【文 献】

井上真美・牧山正男（2009）：滞在型市民農園利用者の地元住民との交流に対する意識と行動―クライン

- ガルテン八千代を事例として一. 農村計画論文集, **27**, 221-226.
- 笠間市 (2023a): 市の紹介. <https://www.city.kasama.lg.jp/page/page012697.html> (最終閲覧日: 2024年3月5日)
- 笠間市 (2023b): 交通案内. <https://www.city.kasama.lg.jp/page/page000167.html> (最終閲覧日: 2024年3月5日)
- 笠間市 (2023c): 『笠間市デジタル田園都市国家構想創生総合戦略』 笠間市.
- 笠間市 (2023d): 『農業経営基盤の強化の促進に関する基本的な構想』 笠間市.
- 笠間市史編さん委員会編 (2004): 『笠間市史地誌編』 笠間市.
- 工藤 豊 (2009): わが国における市民農園の史的展開とその公共性. 日本建築学会計画系論文集, **74**, 2043-2047.
- 住吉康大 (2021): 日本における「二地域居住」の実態と地域振興との関係性—千葉県南房総市および周辺地域を事例に—地理学評論, **94**, 348-363.
- 祖田 修 (1981): 西ドイツのクライנגルテン制度—都市地域計画の一条件—. 龍谷大学経済経営論集, **21**, 70-82.
- 永井伸昌・星 政臣 (2007): 山梨県甲斐市における梅の里クライングルテンの成立基盤. 地域研究年報, **29**, 99-110.
- 農林水産省 (2020): 『食料・農業・農村白書』 農林水産省.
- 長谷山俊郎 (1996): 滞在型クライングルテン導入の意義—長野県四賀村の取り組みから—. 農業および園芸, **71**, 1049-1054.
- 畠山諒子 (2010): 長期滞在型グリーン・ツーリズムの維持メカニズム—クライングルテン八千代を事例に—経済地理学年報, **56**, 177-178.
- 宮下聖史 (2006): 日本型グリーン・ツーリズムの特質と地域的展開—長野県四賀村を事例として—. 立命館産業社会論集, **42**, 109-131.